総合政策学部の
これまでの10年を振り返り、
これからの10年を展望する。

総合政策学部シンポジウム

■日　時　平成28年7月22日（金）16：40〜18：10

■会　場　名古屋キャンパス　清明ホール（図書館・学術棟３階）

■パネリスト

梅村学園常任理事・梅村学園学術顧問　奥野信宏氏

中京大学総合政策学部　教授　佐道明広氏

〃　由里宗之氏

〃　桑原英明氏

■司　会

中京大学総合政策学部　教授　竹田昌次氏

（竹田先生） 総合政策学部の『フォーラム』ではシンポジウムを2年に一度開催しております。毎回、こういうシンポジウムでは、総合政策学部でどんなことを勉強するのかということを主として、開催しましたけれども、たとえば慶應義塾とか同志社とか、近所では愛知大学の地域政策学部とか南山大学の総合政策学部の先生をお招きして、どんな工夫を、どんなことをされていますかというようなことを伺っていたんですけども、そろそろ本学の総合政策学部も10年経過して、自分たちで過去を振り返ってみて、今までどんな卒業生を送り出してきたのか。特に良いところ、悪いところ、これをなるべく、主として総合政策学部の1年生、2年生に聞いてもらおうという趣旨で開催しました。

というのが今回の開催趣旨で、だから今日のパネリストを今から紹介しますと、君らから向かって右側の、奥野信宏先生は、2005年に総合政策学部ができたのですが、それから完成するまでの4年間、即ち初代と2代の総合政策学部長です。隣の佐道先生は、それから第3代目の2009年10年の総合政策学部の学部長。その隣の由里先生が、それから2年間の学部長。それからその後2年間の桑原先生が学部長ということで、10年間を振り返ってみて、主として君たちに聞いてほしいのは、今まで総合政策学部の先輩たちは、どんないいところがあったのか、悪いところがあったのかを、この政策学部の先生、中でも学部長であった先生から直に聞いてみていただきたいという趣旨で開催しました。

シンポジウムは3部構成です。第1部は、今までの10年間を振り返って、総合政策学部という学部があまり市民権がなかった時代にできて、今までどんなことをやってきたのかというイントロダクションです。それを各先生方に2分ぐらい喋ってもらいます。

第2部では、総合政策学部の、主として卒業生とかを思い浮かべてもらいながら総合政策学部の卒業生の非常に優れている点、良かった点、みんなにも引き継いでほしい点を喋っていただきます。それと第2部の後半では、反対に直してほしいな、何とかしてほしかった問題点を喋っていただきます。それが第2部です。

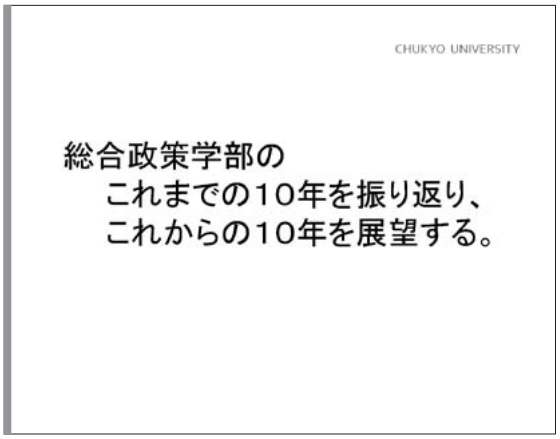
第3部はこれから10年間、社会も変化してくるし、総合政策学部もどういう道を行くのか、その中で、これから、君たちに、これからどんな学生になってほしいのかということを喋っていただくということです。そういうのが開催趣旨です。1部2部3部構成です。

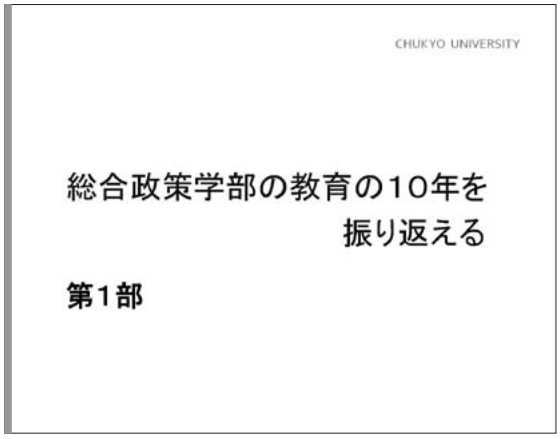
あらかじめキーワードというのを先生から書いていただいて、たとえば総合政策学部、卒業生のいいところは何かというような質問でキーワードをいただいています。こちらの要請としては二字熟語で、たとえば誠実とか元気とかいうような漢字二文字そういう言葉で書いていただきたいということで出してもらいました。なかなか大学の先生は表現力がありすぎて、二字熟語でまとめた人もおられるし、二字熟語でまとめられなかった先生もおられます。そういうふうにちょっと多様な形で出てきております。

で、君たちに、フロアの人に質問してほしいのは、第2部の、先生方から総合政策学部の主として卒業生を思い浮かべながら、長所と短所を聞いたときに、聞いてから、少しフロアの学生諸君から質問をいただこうかなと思います。それと第3部の最後に、これからどうあるべきかという話をいただいてから、フロアから、フロアの先生も含めて、教員の方も含めて、学生も含めて、フロアとの質疑応答にしたいと思います。

以上が前振りで、ちょっと長くなりましたが、それではただ今から、私、司会の竹田ですが、総合政策学部ができる前の最後の商学部の学部長をやっていた関係でここに座らされております。

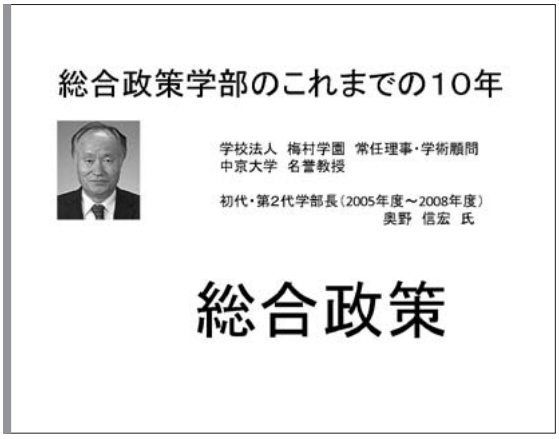
それでは始まりますけども、総合政策学部のこれまでの10年を振り返り、これからの10年を展望するというテーマで、総合政策学部のこれまでの10年というので、まずイントロダクション部分から、じゃあ奥野先生、始めに2分程度でお願いします。





第1部　総合政策学部の教育の10年を振り返る

（奥野先生） 奥野です。竹田先生からご紹介いただきましたが、2年前まで総政の教授をしていました。教授は辞めましたが学園にはいまして、今日は引っ張り出されました。昔のことを思い出しながら、話



をしたいと思います。専門は経済学でして、経済概論を担当してきました。今は大森先生が担当していらっしゃいます。私は中京大学に来る前ですが、前の大学にいるときに、南山大学の外部評価委員を依頼され、3、4年担当しました。さっき話が出ましたが、ちょうど南山大学の総合政策学部ができた直後でした。その当時は教養部を改組する大学が多くて、新学部に総合という名前を付けるところもかなりみられました。教養部には多様な分野のたくさんの先生がいらっしゃるので、そういう言葉をかぶせるということだったのですが、私はそれを批判的に見ておりました。そのとき、南山大学の外部評価委員会が開催されまして、総合政策というのは一体どういう学問なのか、誰が名前を付けたのかという質問をしましたら、マルクスさんが学長でしたが、僕ですと言っておられました。

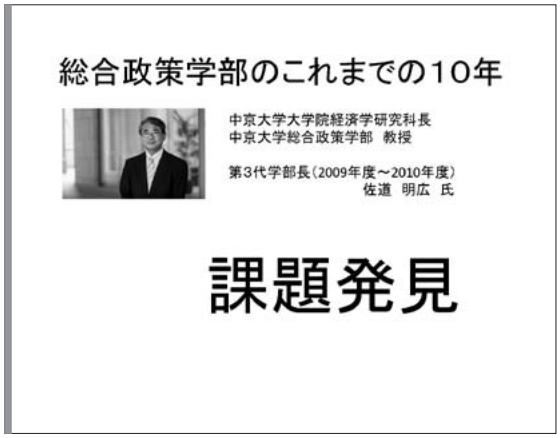
数年後に、自分がまさか総合政策学部の教員になるとは思ってもいなかったのですが(＊笑い)、なった以上は、学部長として、また一人の研究者として責任を自分なりに全うしなければいけないと思いました。学部ができたのは2005年ですが、2006年に「公共の役割は何か」という本を書きました。これは幸い、学会、官界、産業界、それから市民団体等々、多様な方から多様な反応をいただきました。同時にその当時でありますが、政府からこれからの国の形、地域の形をどのように考えたらいいか、そのことを考えろという役割をいただきまして、政策の企画立案過程では「総合」が大事なのだ、多様な分野から見ることが大事なのだということを、つくづく感じてきたわけです。

その2年後の2008年に、「地域は自立できるか」という本を書きました。その後2010年、12年と多様な主体が参加して地域と国土を作るという視点から、「新しい公共を担う人びと」と「都市に生きる新しい公共」という本を出しました。この2冊は共著でして、今、国交省の都市局長をしていますが、栗田氏と2人で書いて上梓しました。栗田氏とは、新たな公という概念を打ち出して、国の計画に反映させてきました。

私は国、地域の施策の基本理念として、交流連携とそれによる人のつながりが新しい価値を見出すということをベースに据えています。今度の新しい第2次国土形成計画ではそれを「対流」という言葉で表現しました。大学はその典型でして、世界の各大学を熱源とする人、情報の双方向の対流が新しい価値を生み出していく、これが大学というものだと思っています。総合政策の学問をどう作るかは、依然として大きな課題ですが、そうした視点から私は「社会サイドの経済学」というのを今、考えているところです。

(竹田先生)先生、申しわけありませんけれども、イントロダクションなので、

(奥野先生)自分はもう教授を辞めましたが、依然として研究で悪戦苦闘しておりまして、悪戦苦闘しながら学生諸君と交わる、それが何がしかの教育機会になればと今も思っていますし、この約半世紀、そ



ういう思いで大学教員をしてきました。

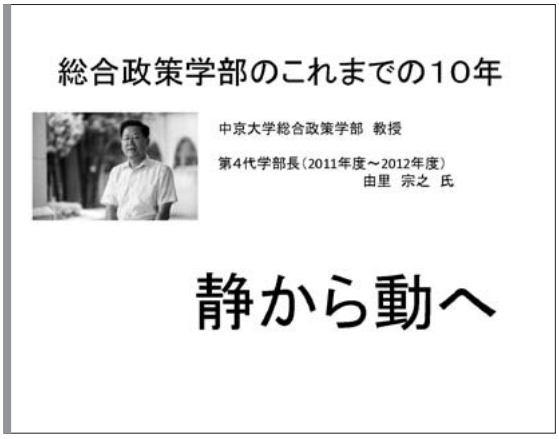
（竹田先生） 申しわけありません。各自、イントロダクションで、総合政策学部の10年はどんな特徴があったかということで、後ろに出していただいたキーワードを、解説していただくという。じゃあ佐道先生、時間厳守で（＊笑い）。

（佐道先生） はい、時間厳守でいきたいと思います。私は奥野先生の次の学部長でした。奥野先生に4年やっていただいて、やはり最初に作るときは相当大変だったと思うんです。いろいろなことを何もないところから作っていくということになりますから。ですから私は、それをうまく継承していくというのが役目でした。総合政策という学部自体は90年代に慶応で最初にできてきたのですが、これは時代の要請なんですね。それまでは法学とか経済とか、そういう伝統的な学部があり、もちろんその個別の学問は必要なんだけれども、その個別の分野だけでは解決できない問題がいろいろ出てきた。それを総合的に見ていこうというので、時代の要請でできてきた学部だったと思います。しかし、なかなかそれは、すぐに社会に定着するということにはならないという中で、この学部ができました。

この学部はもともと商学部を改組して作った。これは日本にいろいろたくさん総合政策学部がありますけども、実はかなりユニークなでき方なんです。ビジネス分野、それから公共政策分野ということ

で、皆さん今、勉強しておられると思いますけれども、ほかの総合政策学部とはちょっと違う、新しい形での総合政策学部になっています。

ここに課題発見と書きましたけど、結局、政策、つまり物事をどう解決していくのかということです。最初に何が問題なのかということを見つけられなかったら解決のしようもないのです。問題の発見



が大事で、それをいかに皆さんに学んでいただくのかということを苦心しながら、奥野先生が作られたものを私が引き継いで、またさらにあとの先生たちに渡していったということだと私は思っています。以上です。

（竹田先生）どうもありがとうございました。続きまして由里先生。

（由里先生）はい、商売の世界で三代目になると、初代の苦労も分からずに、そもそもアホが三代目になることが多いから、店を潰すという言い伝えがありますけど（＊笑い）、私が三代目、いってみたら、なると思ってなくてなった学部長、正直申し上げておきますけれども。私、もともと商学部の頃からいた人間でして、だから竹田先生と一緒の経験で、商学部がなくなるというその思い切ったアクションも知っているんですね。その上で、気が付いていたら総政になっていたということを、奥野先生、佐道先生のもとで一教員として経験してきました。だから私は、私の代でこの「静から動へ」というのが起こったというより、やはり商学部時代からの先生方にとり、これっていうのは非常に大きな変化だったと思います。ただ、その場合に、単に「動く」ことだけをずっと繰り返しても見えてこない、と心がけてきました。特にゼミなんかは私、実は商学部時代から基本的に変えていないです、今に至るまで。変えてないから、P研報告会とか予選で落ちるんですけど。「静」の部分にもいいところがあるし、立ち止まって考えようという。「動」だけが非常にもてはやされるというのも、「動」であるだけでもてはやされるというのもおかしいというようなことを、考えながらやっていました。だけど実際には「動」に切り替わったわけで、それがどこまで行けばいいのか、どこで止まる部分があってもいいのか、そういうことを考えた学部長時代だった、ということです。以上です。

（竹田先生）続きまして桑原先生、お願いします。

（桑原先生）はい、第5代学部長を務めました桑原です。キーワードとして「子育ち」としましたが、別にふざけて書いているわけではありません。恐らく私の最初、1回目の発言は最後だろうと予測をしまして、そういう時に前の方と同じ発言をしても、重複をしても意味がないだろうということで、敢えて「子育ち」という言葉を挙げました。

そこで、学部が開設されてから暫くの間、学部固

有科目で必修科目の総合政策概論を、私が担当していましたが、総合政策概論をどう教えようかということで非常に頭を悩ませました。そして私なりに考えた末に辿り着いた暫定的な結論は、公共政策の分野である政策学を中心として総合政策概論を教えようということでした。とりわけ政治学ですとか行政学というのは、課題発見から課題解決に至る政策過程に関する研究の蓄積が沢山あります。それからあと、私の専門領域の行政学、地方自治では具体的に課題解決をする際の道具を政策手段と呼んでいますが、ある課題に対してどのような政策手段を採用するのかという部分でもかなり研究の蓄積があるということで、主としてそういうところを中心として総合政策概論を教えていたと記憶しています。さらに私が担当した後半の３年ほどは、ビジネス領域が専門である坂田先生に入って頂き、公共政策とビジネス領域の双方を学ぶことで、両者を統合する学問領域として総合政策学を学ぶことができないかと、そう考えた記憶があります。

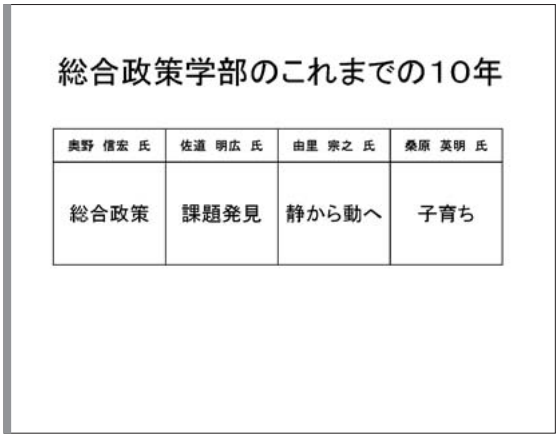
そういう中で、なぜ「子育ち」としたのかということですが、「子育て」という言葉が、皆さん一般的に聞かれていると思いますけども、「子育ち」という言葉はちょっと違和感があって、あまり一般的には使われていないですね。そこにどういう意図を込めたのかというと、総合政策学は、政治学や経済学のように確立した学問体系があって、それを私たち教師が、「子育て」をするように一方的に教えるというものではないと思うんですね。この教える側と受ける側とが一方通行では決してないという意味で、むしろそれぞれの受講している皆さんが、そこで総合政策学とは何かというのを考えていただく、いろいろな情報の提供ですとか、あるいは素材を提供することが、総合政策学部の役割であり教師の役割だと思っていたわけです。

しかし学部が開設してから10年が経ちますと、実は我々が学生の皆さんに教えられることの方が多くて、２年次以降の科目ですが、実際に「社会人基礎力講座」ですとか、あるいは「フィールドワーク」の授業では、実際に色々な企業の方々とのコラボであったり、公共政策の分野では、自治体や行政機関に対して政策提案を行ったり、更には政策提案だけではなくて、行政とコラボして具体的な地域づくり事業にも関わる学生の皆さんも出てきて、まさに大学と地域社会とが連携をしていく中で、公共政策学がその一端を担っていますけれども、学生の皆さんも参画することにより総合政策学というものを構想できる、そういう段階に来たのではないかなというふうに考えて、「子育ち」というキーワードを挙げた次第です。以上が、振り返っての10年ということです。

（竹田先生）どうも４名の先生方、ありがとうございました。総合政策学部のこれまでの10年ということで、それぞれの先生方に出していただいたキーワードとはこういうことで、ちょっと解説、主張を含めて喋っていただきました。

第２部　これまでの総合政策学部の学生・卒業生の特徴を俯瞰する

（竹田先生）これでイントロダクションは終わって、いよいよ学生諸君に一番聞いてほしい第２部です。これまでの総合政策学部の学生・卒業生の特徴を俯瞰するということで、まず今までの卒業生とか学生

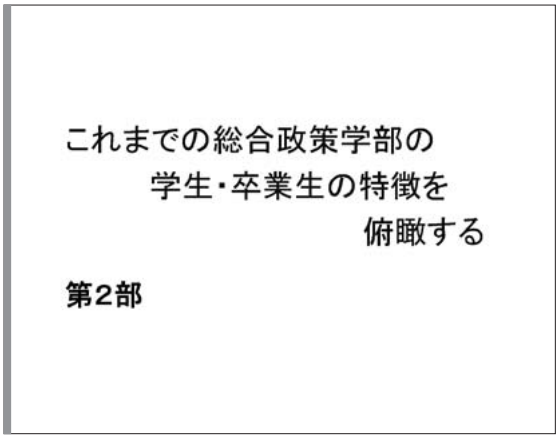


の長所というのを5分、短所はまたあとで2分ぐらいで喋ってもらいますけども、学生さんに今までの卒業生の長所ということで、奥野先生から、またお願いいたします。

（奥野先生）私は毎週のように全国どこかで、こういう会に出ておりますが、だいたい竹田先生が座ってらっしゃる所の立場にいて、30秒で話してくれとか、1分で話をまとめるようにとか言っています。今日はその役は竹田先生がやってくださっているので、私はあんまり時間を気にせずに、好きに喋らせていただいて感謝申し上げます。

長所・短所というと難しいですが、最近の学生の特徴はあると思います。それを踏まえて、どういう学部教育を行うかということですが、私は大学というのは一時期の通過点で、どこの大学のどこの学部で学んでも、いっこうに構わないと思います。総合政策学部も同じでして、近年、理系とか文系とかいった区別を世間ではもっともらしく言いますが、そんなに大きな違いないですよ。明治時代の便宜的な分類分けが高校で理系コースだとか文系コースだとかで実質化したということだと思います。典型的な男と女はいますが、仕事で男と女を区別することは意味がないのと同じことではないでしょうか。私は経済学が専門で、経済学者とは一緒に仕事をしますが、医学部の医学者たちともずいぶん仕事をしてきましたし、今だって半分以上は工学部の人たちと一緒に研究しているわけでして、あまり理系・文系ということを意識しませんね。

長所については、知識の吸収・活用・伝達という



ことについて、2点お話ししたいと思います。先ほど佐道先生と桑原先生から「課題の発見、政策提案」という話がありました。私もこれは大事なことだと思っていますが、授業では批判してきました。「そんなことをやっちゃいかん」ということを学生諸君には強く言ってきたわけです。多分、佐道先生や桑原先生は同じ考えだろうと思っていまして、同じことを別な形で表現するということでありますが、問題発見というのは過程が大事です。私も研究者を長くやってきていますが、一つの研究課題を発見するまでには、古今東西の文献を読んで、世界や日本の学者と議論して、やっと課題が一つ発見できる。それができれば6割か7割ぐらい研究終わったみたいなものです。

学生諸君が会社や役所に入って、早速、問題発見！政策提案！なんていったら、それこそ横にいる上司から尻を蹴飛ばされてしまうのではないでしょうか。大事なことは、それが周囲から受け止められてもらえるような、あるいは認められるような実力を蓄えないといけないということだと思います。勉強を何もしないで、思いつきで課題発見とか政策提案とか、こういう安易なことは絶対にやっちゃいけない。

2番目が、役に立つ学問ということです。今朝も授業で言ったのですが、中京大学の授業評価の質問事項に、授業が役に立ちましたか、とかいう趣旨の項目があったのではないでしょうか。これはおよそ下らない項目だと思います。役に立つといっている学問なんて、ろくな学問じゃない。二十歳前後にやることではないと思う。

ちょうど10年ぐらい前ですが、新入生が私の部屋に一人で来まして、勉強したいが何をすればいいんでしょうかと質問をしたので、帰りに岩波文庫を1冊買って読めと答えました。何の本がいいかと問うから、何でもいい、最初に手に取った本でいい、それミカン箱一箱読んだらまたおいでと言いました。学生は更に、ミカン箱一箱ですか、何の役に立ちますかというから、何の役にも立たないといったら、呆然としていました。それで帰すのはちょっと可哀想なので、20年後には役に立つという話を付け加えたことがありました。

高校の国語の教科書に、たとえば芥川龍之介の「蜘蛛の糸」とか「羅生門」とかがあったと思います。あれを読んで何の役に立つかですが、そこで芥川龍之介とか、その時代の文学に対するアンテナができて、こういう場所やマスメディアなどで、その時代の文学、龍之介、蜘蛛の糸、羅生門と出てくると、それが全部アンテナに引っかかり、自分の中に蓄積されていくわけです。君たちが20年、30年たって、部長、重役だと偉くなったときには、そういう地位に相応しい知識と人格ができている。そういうことが大事なんだと思っています。

（竹田先生）どうもありがとうございました。じゃあ続きまして、総合政策学部の学生、卒業生などの長所を皆さんに伝えて、

（佐道先生）3分でしたっけ？

（竹田先生）4分。気持ちよくなってもらうために。

（佐道先生）皆さんの卒業生を思い浮かべて、これは奥野先生の代から最初に始められたんですけど、皆さん、総合政策プロジェクト研究報告会というのがあるというのを聞いたと思います。これはそれぞれが勉強してきたことを発表するということなんですけれども、私たちがこの学部を作るときに考えた

のは、そういうイベント、あるいは企画ですね、それに学生の皆さん自身に参加をしてもらって、学生の皆さん自身に運営をしてもらおうということでした。つまり総合政策って、いろんな見方があると思うんですけど、実は総合政策学というのは学問体系的にいうと、なかなか難しいんです。ちょっと難しい話になって恐縮ですけども。

でも、この学部で学んでいただく学生の皆さんには、実はかなり実践的な分野だというふうに思っていただきたいんですが、実践的なものというのは、つまり自分で何とかやっていくということをやらないと身に付かないんですね。私のところのオフィスラリーに来てくれている学生にはよく言っていますが、たとえばテニスの選手になろうと思って、テニスの本を読んでテニスのビデオを見ても、テニスの試合ができるわけではないんです。ちゃんと練習しないとできないですよね。実践というのは、その日々のいろんな積み重ねが必要なんです。で、その機会を学部としてもたくさん与えようということを考えました。それに皆さんの先輩たちは、かなり積極的に取り組んでくれたんです。

私、積極性というふうに書きましたけども、プロジェクト研究、たとえばプロジェクト研究をやるときに、報告会をやるときに、今も運営委員会となって、学生の人たちが主体的にそこに参加をして、積極的にいろんな役割を自分たちで引き受けてやってくれている。それがあるからこそ10年以上積み重ねがあって、運営できてきているんだと思います。それは報告会だけではありません。ほかのものもそうです。

総合政策学部の学生はみんな元気がいい、積極的にいろんなところでやりますよねという評価が多分、外ではできているというふうに思いますが、それは皆さんの先輩たちがそういう活動をして、そういう伝統を作ってきたんだということを思っていただければありがたいですね。積極的に何かに取り組んでいるという学生は、社会でもやっぱり認めてもらえる。そういう目で評価というのを、やっぱりちゃんとしてもらえるわけです。ですから、自分がやるのはどうしても尻込みするとかいうことではなくて、何事にも自主的、積極的に取り組んでいくという先輩たちの作ってきた伝統を是非、皆さんも継承してください。

（竹田先生）では続きまして、由里先生、学生の長所を。

（由里先生）先ほど、私のゼミの運営は基本的に商学部から変えていませんと言いました。そうはいいながら、私自身も総政の学生が変化したからこそ変えた部分はもちろんあります。ゼミ運営、ゼミの内容にしても。だからちょっとそのへん、旧商学部って一体何なのかと、少し聞いておいてもあまり損でもないでしょうから、商学部のときの様子から、

ちょっと振り返ります。実はこの「素直」というのは、商学部の学生から続いて同じ言葉で、私、彼らに対してもそのいいところとして、彼らを描いた言葉として、同じようなシンポジウムがあっても言ったと思います。というのは、私が赴任したとき、1998年でしたけど、商学部のもう辞めていかれる大先生の対談で、この「素直」という表現が使われていたんですね。で、それが実はいい面でも悪い面でもあるというのは、私、短所でも「素直」と書いてますけど、そこはだから昔も今も一緒かなというふうに思います。先ほど奥野先生がおっしゃったように、中京大学である限り、そんなに学部が違っても違うものでもない、というところが表れているのかもしれません。

で、「素直」がいいところに働くというのは、商学部のときであれば、いろんな会社の経営の各種側面ですね、お金であれマーケティングであれ組織であれ、そこのスキルを学ぶわけですけれども、もっと分野がいっぱいあるわけです。会社のことに関して、経営のことに関して。で、学生たちが各々、やはり素直に聞いてくれるので、こちらとしてはまた、もう少し突っ込んでとか、前の復習をして、ちゃんともっと身に付かせてとか、思えてくるわけです。その回転がうまくいっていたというのが、私、赴任して思いました。ただ、そうでない学生も確実にいるわけですけどね、打っても響かない。

そこが、総政になると、いわゆるスキルですね、社会の仕組みがこうだという教え方だけでは足らなくなってくる。佐道先生がおっしゃったように、一種の問題を見出して、それを応用するという側面に光を当てないといけないのです。でも、それはそれで、「応用するために学んだことをこう持っていくんだよ」みたいなことを教えると、ちゃんと聞いてくれる。しかも話が応用だから、しかも社会に対して自分たちのアクションが効果を持って効いてくるということだから、学生たちの雰囲気が明るくなる。目が生き生きして表情が明るくなる。そこらあたり、私としては前向きな変化として、ちょっと驚きだったし、良かったと思いました。やっぱり学部の名前も変えてみるものかなと。この程度の言い方だと奥野先生に怒られるかもしれませんけど。以上です。

（竹田先生）じゃあ桑原先生。

（桑原先生）ほぼ共通しているところでが、私自身は総合政策学部ができたときに中京大学に来まして、それまで15年ぐらい、北関東の私立大学にいて、総合政策学部の学生の皆さんと接して、大きな驚きがありました。前任校が悪いというわけではないんですけども、地理的に北に行くほど冬は寒いので、無口であまり喋らなくて大人しいという学生たちに接していて、彼らを4年間で卒業させるのに苦労した覚えがあります。その時の大学では何をやったかというと、1年生2年生の授業科目の中に必修の実習科目であるフィールドワークが組み込まれていました。実際に学生たちに遮二無二にそういった機会を与え、ゼミも必修でそれぞれの教員が全面的に面倒を見る、そういう仕組みでした。

しかしながら、こちらの中京大学総合政策学部に来まして、学生の皆さんの雰囲気がまったく違っていました。ここにキーワードを書いてますけど「明朗快活」です。本当に総じて明るくて、ハキハキしていて、積極的であることに感銘を受けた記憶があります。これは気候の違いもあるのかなとも思いますけども、恐らく、経済的にも豊かな地域で、なおかつ皆さんが持って生まれた気質に加えて、周りの人的な環境も非常にいいんだろうなというように思っ

たわけです。

そういったものはいい面に作用することが多いんですね。今、由里先生も佐道先生も仰いましたが、我々教える側からすると、何か小難しい顔をして、ネガティブな対応を取られると、もう話すこともない、あとは皆さん自分で考えろとなってしまうのですが、総合政策学部の学生の皆さんは、そういう意味ではいつも前向きで明るくて、そうすると、もう少しこちらも何か関わりたいなという気にさせるんですね。そういうところが非常にありがたいと思っていますし、皆さんが現実の社会に出た時に、もっとこの力が発揮されると思います。これはどこに行ってもそうですが、本学並びに本学部の卒業生は、何でも吸収する力が強くて、目の前の高いハードルを逞しく乗り越えている、そこはとても評価をしているというところですので、さらに皆さん、笑顔になって、多くの経験を積んでいただきたいと思います。以上です。

（竹田先生） ありがとうございます。4人の先生方に出していただいたのは、学生の、ないしは卒業生の長所はこうだったよということです。これから君たちはこういうのとは、また違うものを作っていただきたいと思います。また知識の吸収・活用・伝達、積極性、素直、快活といったこと今までの総合政策学部の学生の長所を、もっともっと伸ばしていってほしいと思います。

次は、この反対の、ちょっと直してほしいといったことを、総合政策学部が今までの、君らじゃなくて、今までの卒業生を主に頭に置いて、今度はあまり悪口言われるのは気持ちよくないので、先ほどよりも少し短めでお願いします。じゃあ奥野先生、卒業生を念頭に置いて、昔の学生の総合政策の短所をお願いします。

総合政策学部の学生の長所

奥野 信宏 氏	佐道 明広 氏	由里 宗之 氏	桑原 英明 氏
知識の吸収・活用・伝達	積極性	素直	快活

（奥野先生）先生方の話を聞いていて、私は諸君たちに何かを教えるという視点で接したことは今までなかったということを正直感じています。私が大学に長年勤めてきて、一つだけ自慢できることは、大森先生もそうですが、多分経済学では日本で一番、大学教授を出している研究者ではないかと思います。博士号もたくさん出しています。しかし私が教育したという意識は、あまりないですね。勝手に研究室に来て、私も含め一緒にみんなで議論しながら博士論文を書いて出て行ったという感じですね。私も仲間の一人として徹底的に議論はしましたが、あまり学生を教育しようと思ったことはありません。

大事なことは、ここに印象力と書きましたが、人のネットワークを作る力だと思います。仕事は一人ではできない。研究者だって研究室にいて一人で仕事しているわけではなく、国内海外でいろいろな人とネットワークを持っていて初めて仕事ができるわけです。互いに知恵をもらったり、もらわれたりしながらですね。

学生諸君もゼミなどには積極的に参加すべきだと思います。あいつと付き合ってどうなるのだと思うかもしれないけれども、そのあいつが20年後には化けるのです。ある会社に例えば営業に行くとき信頼できる知り合いがいるとすぐ仕事に入っていけますが、そういうネットワークは非常に大きい意味を持っています。私はいろいろな会社の人などと話をする機会が多くありまして、相手が私のゼミ生や学生だったというようなことは頻繁に経験します。彼らとしばしの雑談をしますと、学生時代の知り合い同士が互いにネットワークを持ちながら、仕事をしているということがあります。印象力というのは、そういうネットワークを作るという意味でして、それによって人のつながりを作っていくということです。これは君たちの短所というわけではないけども、若い人は、なかなかそういうことが一般的には理解できにくい。積極的にゼミにも参加してネットを作っていただきたいと思います。

（竹田先生）じゃあ続きまして、佐道先生。

（佐道先生）独創性というのを書いたんですけども、これは総合政策学部の学生だけのことじゃなくて、皆さんの世代といいますか、環境がそうさせることがあると思うんです。つまり今、便利になりました。パソコン、スマホでちょっと検索をすれば、いろんな情報が瞬時に出てくるという時代になりました。でも、それで検索して便利に、いろんな知識が得られることになったんですけど、それって結局、ほかの人も同じように得られるものなんですよね。そういったことができない昔は、何を読むべきかという選択から始まって、そしてそれをいかに読み込むかということをやってきた。結局、社会に出て、あなたは何ができるんですか、あなたはどういう人ですかという、その自分の考えとか意見とかということをきちんと持たないと、ちゃんとした評価がされないんですよね。ほかの、右の人も左の人もみんな同

じです、私はほかの人の意見を知っていますというのでは話にならない。

さっき長所で積極性と書きましたが、実は積極性、もう一つ進んだ積極性が必要なんです。たとえば、さっきプロジェクト研究の報告会の話をしました。伝統を先輩たちが作ってくれました。積極的にいろんなことをやってくれました。だけど10年やってきて、過去に先輩たちが作ったマニュアルを、同じようにやっていくんです。それは学んだということにはなるんですけれども、マニュアルを学んで、マニュアル通りにやっていこうといするというのは、面白くないと思いませんか？　たとえば3年経ちました、5年経ちました、自分たちのやり方で今度ちょっと変えてみようというのがあっていいはずなんですね。そういう努力をする、そういう自分たちらしさ、自分たちの世代らしさというのを見せていく努力が、ちょっと皆さん欠けているんじゃないかなと。それで、独創性（の欠如）と書いた。もう一つ先の積極性を持って、自分たちのオリジナルのものを生み出していくということが、残念ながら、この10年間ぐらいは欠けていたのかなと。

奥野先生が印象力という言葉を使っておられますけども、私も結局、同じ内容だと思うんです。印象に何か残るようなことをしないと、やっぱり社会に出て認められるということにはなっていかないわけですね。そこがちょっと今までの先輩たちは、もう一つやってほしかったなという気がします。是非皆さんは頑張ってください。

（竹田先生）独創性の欠如ということですね、正確にはね。

（佐道先生）そうですね、はい。

（竹田先生）あとお二方の先生に喋ってもらって、長所と短所、君たちじゃなくて今までの卒業生を念頭に置いての話なんですけども、それで質問を受け付けますので、ちょっと考えておいてくださいませ。じゃあ由里先生、長所も短所も素直と、由里先生お願いします。

（由里先生）ここでは短所の意味では使っているというのは、スクリーンの文字に付けられた括弧内のコメントを見てほしいと思います。ここで「素直」を、短所の指摘として使っている意味を、括弧内で説明してます。物事を斜めから見るというのが、より高度な知性なんですよ。だから、それこそ先ほど奥野先生がおっしゃったように、何か「教えずして教える」みたいなところが、何かすごい大御所の先生にはあるんですけども。つまり、P研報告会を聞くこちら側としては、「これで解決しますよ」みたいな発表に対して、「そうか？」と思うわけですね。「この政策で進んでいこう」とかいうときには、大体は何か、たとえば副作用に対する配慮が抜けているとか、なぜ今までその政策を採らなかったのかという背景には、表面には出ないけれどもすごい抵抗勢力があるのだ、とかですね。大変合理的に政策案を作ったつもりでも、筋道が通った解決策であるほど、実はここのところにとげが刺さった、喉に刺さったとげみたいなものが隠れていたりします。そこへの気配りが抜けていることが多いんですね。それとか、政策を作るときには発言しないけども、実は実施段階になると、ある集団が猛反対するとか。それっていうのは結局、人間社会そのものの何か、本当に何か、面白い特性みたいなものです。実は多分、奥野先生が先ほどおっしゃった岩波文庫を思いきり読んでおけというのは、要は社会のいろんな角度からの観察

を、何らかの形で若いときにインプットしておけということなのでしょう。それが総体として役に立つみたいな。先ほどマニュアルをそのまま素直に受け取ってはいけないと佐道先生がいいましたけども、マニュアル化した頭では、現実には対処できないことって多いんですよね。そういう意味での、「素直」の下に書いた括弧ですね。ここのことを、より留意していただきたいなと思います。以上です。

（竹田先生）はい、じゃあ桑原先生。

（桑原先生）はい、「効率」というのは、いうまでもなく、費用対効果に長けているという意味の、ややネガティブな意味合いとして挙げました。このキーワードは、何から何まで皆さんがというよりは、戦後70年が経ちましたけども、とりわけバブル経済を経験してその後の「失われた20年」が経過する中で、時代に大きな変革が生じたといった方が良いかもしれません。

私が大学に入ったのは、もう40年近く前ですけども、その時に、必修の政治学の授業を受けた教師は、神様の様な存在でした。そして、これから本当に大学での学問に触れるものだと思っていました。、しかし、この教師が発した最初の一言は、「君たち、こんなところで私の講義を聞いてる暇があったら、ほかの大学の教師の講義を聴くのも良いし、あるいは図書館で手あり次第、本を読みなさい」といわれて、非常にショックを受けたと同時に、ああ、これが大学なんだと思ったんですね。しかしながら、逆に今は大学がそういう状況を許さないんですね。特に政治学でも行政学でも、この50年間にものすごく学問の進歩があって、皆さんに学んでもらうべきことが本当に倍々ゲームぐらいで増えてきている。私が受けたときの政治学なんかは、大体、人間とは何かとか、政治とは何か、そういう話が延々と1年間ぐらい続いて、その先生が訳された翻訳の本を読んで、最後は自分の書きたいことを答案に書くみたいな状況でした。そういう面では非常に皆さんにとって大きな時代の波が押し寄せています。

そこで、これに伴って、学生の皆さんが一番感じているのは、特に総合政策学部は、学部固有の必修科目と選択必修の科目が多いので、どうしても皆さん、結果として多くの講義を黙々とこなすことに成る訳です。ただ他方で、1、2年生のときにそれだけの知識を吸収していないと、先程来、出てきました3年生の時のプロジェクト研究報告会ですとか、あるいは4年間で社会に出ていくことを考えると、とても時間が足りないという部分があるんですね。そうすると、特に1年生の間では、それぞれの授業をこなして、できるだけ一定の成果を最小の費用（コスト）ですまそうというインセンティブ（誘因）が働きがちとなり、そういう行動になりがちといえます。これは時代の変化が大きいと言えますが、総合政策学部の特性もあって、私にはそれが少し短所みたいなところに見えています。

ただし、それは、短所というのは逆にいうと、皆さんにとって長所にもなると思うんですね。時間の使い方をうまくするとか、それから一人で勉強するには限りがありますから、グループで学ぶとか。大学図書館は、とても充実していますから、図書館のグループ演習室を使うとか、中京大学は授業が1限から4限までしかないですから、5限以降図書館を有効に活用するなど、そういったところで克服してもらいたいと思います。このコスパに優れている（効率）と、ややネガティブな表現ですけども、期待を込めてこういうキーワードを挙げました。以上です。

（竹田先生）はい、ありがとうございました。効率性を重んじすぎるということね、二文字で書いてくださいと、僕のほうから注文したから、先生方には申し訳ありません。4人の先生方に出していただいた総合政策学部の卒業生の学生の短所と長所を書いていただきました。

学生の皆さん、ちょっと時間を取りますので、

（竹田先生）フロアから手を挙げてもらえればよろしいんですが。

（学生）由里先生の「素直さ」について質問があります。物事は斜めから皮肉っぽく眺めるべきとありますが、何事も身の回りにあることを常に考えて生きていけということで、よろしいでしょうか。

（由里先生）もう答えていいですか？

（竹田先生）答えていいです。

（由里先生）僕の生き方は、歪んでいるというか、あまのじゃくというか、つむじ曲がりというか、そこに近いけど（＊笑い）、そのとおりアドバイスで皆さんにいつもやってくれ、ということではないです。ただ、政策マターですね、つまり総合政策学部ですから、実際の問題解決ということ、結構大事な焦点にしてますね、各ゼミ、特に各ゼミのP研報告会なんかはね。その際に、それで解決したということでみんなが拍手して終わりで良いのか、ということです。たとえばちょっと例を挙げると、老人のボランティアの力で地域の、たとえば子育てで、保育の問題を解決しようと。それってだけど、たとえば老人が専門知識を身に付けずに犯したミス、そういうのについての責任問題をどうするのとか、突っ込みどころが満載なんですよ。実際に政策を回し出すと、必ず想定してなかったことが起こります。動機としては善意です。だけど、それってじゃあ、本当に裁判までいったらどうなるか、とか。そういうふうに善意で始まったことでも、実際に政策で回そうと

する時に、待てよ、というので斜めになって立ちどまって考えることも必要でしょう。たとえばこういうクレーマーがいたらどうする？とか。それこそ自分だったらこうクレームで突っ込むぞ、とかね、私みたいに皮肉な人間はすぐそっちに発想がいっちゃうんだけど。特に政策問題に関して、ということで、それについては皆さんに一つのアドバイスとして全員に申し上げたかったことです。

いつもそういう態度でいるということではないです。ただ生きていくときにいつも素直だと、政策に相対しても素直になってしまうんです。だから政策以外の場面でも何らかの形で人間学は育んでいくのがいいでしょう。で、人間学の要素の中に必ず、皮肉な人間もいますしね。だから、奥野先生の岩波文庫の話は、ものすごく意味があると思うんです。以上です。

（学生）ありがとうございました。

（竹田先生）ほかに何かありますか。

（吉村さん）お話ありがとうございます。総合政策学部３年の吉村と申します。私は長所と短所、それぞれというよりも、二つを聞いて質問したいんですけども、先生方のお話の中で、PK報告会についてのお話や３年生までのこの研究発表についてのことがいわれていたんですけれども、その報告会の内容について、やっぱり抜けてる部分とかがあるとかいうお話をされていたんですけれども、項目について具体的にどういったことに期待して、それでどういったふうに学生は研究をしていったらいいというアドバイスがあったら、是非教えていただきたいです。

（竹田先生）全員、一言ずつでよろしいですか？　こうしたら、もっとよくなるよということで、じゃあ桑原先生。

（桑原先生）どうも質問ありがとうございます。今までの話の中から少し察するところがあると思いますけども、政策提案ありきではないということです。まずやることは、問題が何かということの現状分析をして、その問題を引き起こしている原因を探求して、そしてその問題について理想の社会の姿、あるいは理想の姿は何かというところに、皆さんの力の８割から９割ぐらいを注いでほしいんですね。そこから最後に政策提案というのが出てくる。そうすると、それは今まで我々が社会科学でやっていた政策分析の方法と、あるいは研究の進め方と、何ら変わりはないんです。そういう面ではオーソドックスな研究をしてもらいたいと思います。

それから、もう一つは、やはりチーム力を養っていただきたいことです。仲間とともに考え行動する過程で、色々と意見の対立もあるでしょうし、それから問題の捉え方も違うでしょうから、それをみんなで乗り越えてもらいたい、ということです。その上で総合政策学部なりの、このPK報告会が意義があるんだという思っています。以上です。

（竹田先生）各自喋っていただきますので、少しずつ短めにお願いします。由里先生。

（由里先生）僕でいいです？　先ほどのほかの方のご質問に対する私の答えが、P研報告会も含めて、特に政策提案マターについて、アドバイスになると思いますけど、その際にチームの中の皮肉屋みたいなのも大事にしてほしいな、ということになりますかね。政策提案としては、プレゼンテーション的にはスマートに作りたいし、その政策の解決策を推す理由を一つ二つ三つ四つ、いっぱい並べていく。だけどそれに対して、「実はこれ、うまくいかないぞ」とか、「副作用があるぞ」とか、要するに口を差し挟みたがる異分子メンバーですね。そういうのが報告会の準備のプロセスで、もうちょっと大事にされていいんじゃないかと思います。つまり「100パーセント解決」みたいなの、逆に嘘っぽいんですよ。だから「ここにこういう問題も残されています」と報告会で言っても、本来、それ、評価ポイントしては下がるどころかアップのはずだと私は思います。だか

ら異分子の皮肉屋も、まぁ私のようなメンバーですね、大事にすればいいんじゃないかなと。具体的なアドバイスとしては、そんな感じですかね。以上です。

（佐道先生）なかなか難しいんですけど、私は政治学でもともと政治史という歴史の研究者ですから、桑原先生からすると政策分析とかいう話をされましたけど、私、実はあんまりそういうの、信用してないですね（＊笑い）、こんなこといってはいけないですけど。つまり先ほどから出てますけど、社会とかいろんなものに対する課題を実践的に考えて研究してもらうということをやってますが、結局取り組めるものというのは、ごく一部でしかないんですね。自分がやっていることが全体のどういう位置付けなのかということを、ちゃんと認識しておいてほしい。それには、つまり人が関わっているということ、たとえばある問題だったら、そこの歴史的な背景とか、そういうものを抜きにして考えていくと、非常に断片的な、部分的なものにしかならない。だから可能な限り、可能な範囲でその問題の背景にあるもの、背後にあるものをちゃんと学んでいこうという努力をきちんとすること。その上で自分たちが提案することが、その中のどの部分に対して対応を考えていけるものなのかということを、ちゃんと認識しておくこと。そういうことがちゃんと分かっている研究発表であれば、あ、ちゃんと、きちんと学んで、きちんと考えているんだなというふうに認めてもらえると思います。

（奥野先生）私は10年間、総合政策学部の教員を務めましたが、ゼミのプロジェクト研究が、発表会で評価されたことはほとんどありませんでした。私がゼミ生に言っていたことは学芸会みたいなことは絶対するなということでした。安易に問題発見！政策提案！などいったりしてはいけないということを言ってきました。ただ、私は発表会を評価していないわけではなくて、先程来、佐道先生からも話がありましたが、運営だけではなくて、内容的にもインパクトがある発表があって、成長している学生がいると思います。宮川先生とか坂田先生のゼミの発表などは全国的にも評価されていて、高い水準のことをやっていらっしゃるわけで、私が教育者として能力がないというだけのことですが、安易な問題発見、政策提案は学生に対して戒めてきました。

第３部　今後10年の社会情勢の変化を予想しつつ、学部の進むべき道を探る

（竹田先生）一番最後にもう一度時間を取りますので、今から第３部に移ります。第３部は今までのことを押さえた上で、それとは別に、これからの今後10年の社会情勢の変革を考えながら、学部の進むべき道を探って、どんな学生さんになってほしいかという、三つのキーワードを各先生からもらっています。これからの10年ということで、じゃあまた順番に奥野先生から。学問の基軸、グローバル化、行動力という形で出てますので、お願いします。

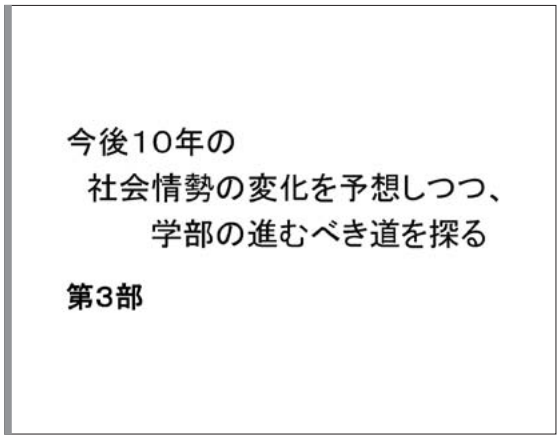
（奥野先生）だいぶ時間使っているので手短に４点ほどお話しします。一つは学問の基軸です。総合政策というのは学際的な分野ですが、学際的な分野というのは多様さが強みです。しかし寄せ木細工のようなところもあって、単なる寄せ集めでは強みにならない。前々から総合政策という学際的学問の基軸を作る必要があるということを申し上げてきました。竹田先生が勉強会などを開催されたときに、私にも喋るようにという話があって、そのとき「地域」というテーマで一つの軸ができるのではないかと話したことがあります。別に地域にこだわっているわけではありませんが、私が関わってきたことなので、それを例として挙げたわけです。大事なことは芯を作ることです。

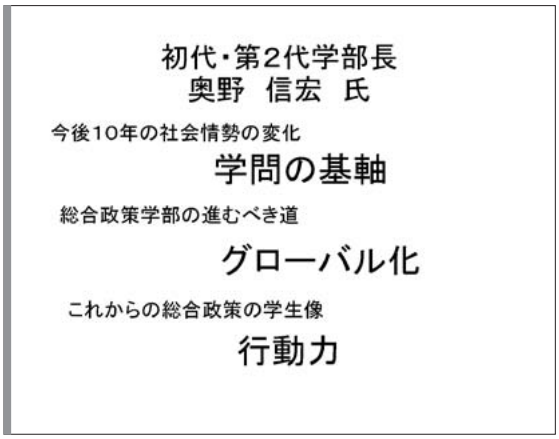
２番目にグローバル化を挙げました。私は地域研究については、国や自治体の政策の現場でも関心を

持って取り組んできましたが、各地域は世界とつながっていまして、地域施策にグローバル化は必須です。各地域のNPO、市民団体、大学、経済界などは世界とつながっているわけでして、それによって大きな対流を引き起こすことができるわけです。

３番目に、大学のグローバル化というのは研究力の強化だと思います。研究に基づいた教育をすることが、最も大事なことです。大学院は典型ですが、研究力がないと優秀な学生は来ません。今では各大学は世界中から優秀な学生をいかに集めるかという競争をしているわけです。研究には国立も私立もありません。そういった中で国際的な競争するということです。NEXT10に「研究力の強化が中京大学を飛躍させる」という文章がありますが、私はこれが、これからやるべき一番大きなことだと思っています。

それから４番目に、どういった学生になってほしいかについてです。役に立つことを標榜している学問なんて二十歳前後にやることではないと言いました。それはその通りなのですが、役に立つ技能は、若い内に身につけておくことが大事です。２点ほど例ですが、一つはパソコンなどのITを使えること、もう一つは英語によるコミュニケーションです。英語によるコミュニケーションについてお話しますと、仕事というのは、内容も仕事のやり方も20年経ったらガラリと変わります。今、小学生の英語教



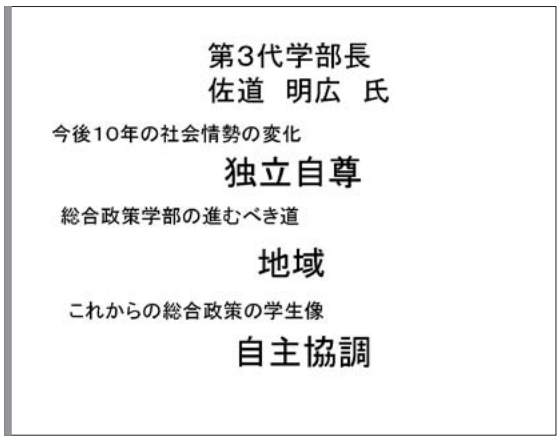


育が始まっていますが、多分、20年後、君たちがいい会社に入って部長や課長で偉そうな顔をしているときに、新しく入ってくる新入社員たちは英語を普通に喋っていると思います。偉いはずの部長や課長が英語を喋れなくて、電話機を持ってオタオタしている。役員になれば、通訳が付くからいいのですが。20年経てば世の中変わりますから、それを見据えて技能を備えておくということですね。

私も英語がうまいわけではありませんが、昔アメリカの大学で教えていたことがあって、経済の話ができる程度です。君たちがすべきことは、まず簡単な英語でのやりとりができるようになることで、NHKの基礎英語レベルの英語を電車の中で聞いて、口でまねることを半年間繰り返すことだと思います。NHKの第2放送のデータベースにアクセスしてスマホで聞き、飽きたら自分で周りの景色を見ながら英語にしてみる。私は今駅に向かって歩いている、ホームで待っている、電車が来た、ドアが開いた、乗ったというようなことをブツブツと英語でいう。多分、半年間、続ければ、君たちは半年後にはそのレベルの英語はペラペラになっている。ただ続けられないということが問題なのですけど。

（竹田先生）じゃあ続いてお願いします。

（佐道先生）はい、今後の10年の進むべき道と学生像ということですけど、今後の10年で独立自尊という言葉を書きました。今後の10年、10年見通すのっていうのはなかなか難しいんですね。今2016年ですけど、2006年ぐらいに、あと10年経ったらこうなるだろうということを、どれぐらいの人がちゃんと予測していたのかとか、難しいですよね。ただ、いえるのは、現在は、先ほど奥野先生、グローバル化とおっしゃいましたが、グローバル化が多面的に進んでいて、ありとあらゆるところにいろんな変化が総合的に、複合的に起こっているということ自体は間違いないわけですね。で、それに合わせて今、大学も大きく変わろうとしていますが、この変化のあり方というのは、多分、徳川幕府から明治になった明治維新のときと、日本が戦争に負けたときの戦後のいろんな改革のときと、それに匹敵するような大きな改革とか社会の変革が多分、今起こってるんですね。それに大学も対応していかなければいけませんし、また皆さんも卒業したら、それに対応していかなきゃいけない、そういうことなんです。



この独立自尊という言葉は皆さんもご存知だと思いますが、福澤諭吉という慶応大学を作った先生が、近代の日本を代表する思想家でもあるんですけども、彼が明治という大変革期に対応していくときに、これからは独立自尊が必要であるということを、変革の時代を表すキーワードとして使いました。私はその明治の時代と同じような大変革期だろうと思うので、この独立自尊というのがまさに今必要だということで使いました。

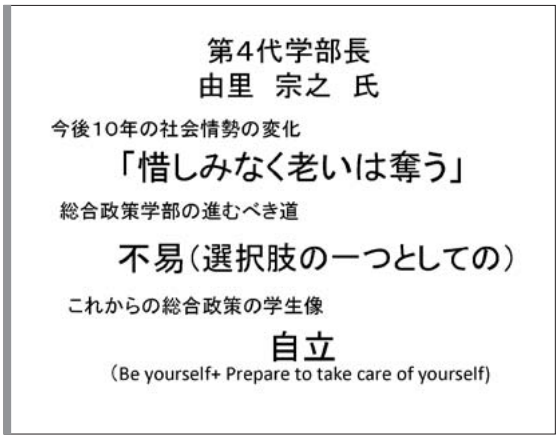
進むべき道で地域ということをいっているんですけども、実は内容的にいうと、奥野先生がおっしゃっていることとほとんど実は同じというか裏腹なんですね。グローバル化が進んでいく中で、それぞれが競争していかなければいけないんです。中京大学という愛知にある大学の中で、愛知県、東海圏にある大学の中で、いろんな大学がまさに生き残りをかけて今、競争し合っているんです。やはりこの愛知東海圏という地域にきちんと根ざして、そこのことをきちんと考えていかない大学というのは、たとえばその大学の個性というものが発揮できない。グローバル化が進む中で、進んでいく中で、愛知東海圏というこの地域がどのような個性を持ち、どの

ような面で競争する、優位性があるのかということを見せていかなければならない。まさに中京大学はその愛知東海圏の個性ということと密接に結び付いていくことによって、特に総合政策学部、実践的なさまざまな課題を考えていこうという学部ですから、そういうことに取り組んでいける学部だろうと思うんですね。グローバル化が進めば進むほど、地域などの個性、特性が必要になる、生き残りをかけて。それをきちんと学び、それを実践していくための考え方やさまざまなものを学ぶということが必要になる。

それから自主協調というふうに学生像ということで作りましたが、自主というのは、まさにそれぞれの個性というものをいかに表していくのかということなんですが、これが、個性というのはわがままとは違うんです。必ず皆さん、社会に出たら分かりますけど、一人だけで仕事をするということはほとんどない。やっぱりチームを組んだり、いろんな人と連携をしながらやっていくのです。どんな分野でもいろんな人とのネットワークを作って協調していくことによって、その中から自分の自主性というものを出していくということが必要になってくるんですね。そういうことがないと、また、何の誰々さんはこういうことをしている、こういうことができる人だというふうに認められていくことはないんですね。ですから是非、いろんな人との関係を大事にしながら、自分というものを、個性というものを出していけるような学生になっていただきたいということで、自主協調という言葉を使いました。以上です。

（竹田先生）由里先生、お願いします。

（由里先生）はい、「惜しみなく老いは奪う」というのは、文学好きの方とか、入試で現代国語を思いっきり準備された方は分かると思いますが、有島武郎という戦前の文豪の「惜みなく愛は奪ふ」という小説からもじったものです。私も実際にそれ読んだわ



けではなくて、受験の際に名前だけ覚えた作品で、最近ちょっと見てみたら、実際には恋愛論というより人生の中で何を一番大切にするか、みたいな人生論なんですけど。まさにこの言葉で言いたかったのは、有島武郎の元の文脈とは別に、老後の社会保障負担で、とめどなく日本が具合が悪くなっていく10年間だろうということです。今後の10年間は。

私の専門分野でいえばGPIFという公的年金を扱っている組織があり、そこが130兆円の公的年金のうちの5兆円を株などの投資の失敗で昨年度すり減らしたとか、来週ぐらいにニュースに出ると思います。別に、私は彼らのやっていることがまずいということより、いろんなことを試みても、いろんな形で少子高齢化のほころびが出ていく、ということが言いたいのです。で、結局は、本当に重いんだぞということが、ひしひしと全体社会を覆っていくのが今後の10年だと思います。老人福祉を支える年金、医療、介護、いずれもですね。

で、それを踏まえた上で、いろんなことが変わらなければいけない、と言えると思うんですね。それは個人ベースでもそうだし、大学の教育のあり方もそうだし。現に国の政策でも、何かと「変われ」といわれています。先ほど桑原先生もおっしゃったけども、効率的にGDPを増やす、日本の生産性を上げる国になれ、などと。だけどそれが教育の改革とかいうことだけで大きく進むんだったら、今までに既に、大学の経済への貢献度は様変わりしているはずなんですよ。だけど、様変わりしていないというのは、それこそ先ほど言いましたように、組織を変えたり、実際に大学というもののパフォーマンスを変える、それ自身が何か簡単なことじゃないからなんですよね。

そこで結局、変に「改革」、「改革」と叫びたててしまうと、今持っているメリットさえも失うと思います。だから、選択肢の一つとして「変わらなくてもいい」ということもある、という認識は大事です。私、アメリカでビジネススクールと似たような公共政策の大学院で2年間学びました。その時に、実務的な意思決定で一番大事なのは、「ドゥ・ナッシング」という選択肢があることだ、ということを学びました。ビジネスであれ公共政策であれ、「ドゥ・ナッシング」。だから、それが大学でもあってもいいんじゃないかと。それは要するに「今の努力をさらに極める」ということです。何もしないとか、だらけていていい、という意味ではないです。それは、あくまで選択肢の一つですよ。ただ、これを選択肢の一つとして入れないと、いろんな間違いが起こるということを申し上げたいのがここですね。

それから「自立」に関しては、先ほど佐道先生がおっしゃった「独立自尊」、明治の大変革期に福澤諭吉先生がおっしゃったという、これの内容とまさに一緒かなと思います。「ビー・ユアセルフ」ということ。それから、これちょっと、先ほどの、学部が今の学部のやり方でいいんだというのにも通じますけども、ただ「変えなければ」と動揺するというのは、一番まずい変わり方をしてしまうパターンでもある、というふうな警戒心も持っておいたほうがいいと思うんですね。その際に「ビー・ユアセルフ」というのは大事です。それからもう一つは、国とか社会とか企業とか、要するに自分のために外部からしてくれる度合いというのは、どんどん減っていくはずです。何でかといったら、「老いは惜しみなく奪う」から。だから老年層が惜しみなく奪っていくから。だから、その際に会社からの給料が上がらなければ、場合によっては会社をどんどん替えてもいいというふうに思った時に、会社を替えることも含めて。それとか、替える以前に会社が潰れるかもしれない。そのようなときに、やっぱり自分で自分のライフプランというのがいつも成り立つように考え、まさに私の教えている、それこそマネープランニングですけど、そういうことも含めて。それ以上にやはり、何で仕事をしていくのか、外から与えられるものでなくて自分からこの仕事をやっているという、いつも自覚があれば、転職も含め、自立していられるでしょう。私自身、転職しています。銀行員から、この大学教員に。そのようなときにやっぱり、この二つの内容を持った「自立」という概念は大切です。それはまさに「独立自尊」の精神と一緒

だと思います。それを皆さん方にもちょっと、佐道先生の上のお勧めと一緒になったわけですけど、心に置いていただけるといいんじゃないかなと思います。以上です。

（桑原先生）佐道先生が3番目のキーワードで、そして私が最後の4番目のキーワードで「独立自尊」を挙げておられますが、同じところで重ならなくてよかったと思います。ちなみに、シンポジウムが始まる前に、それぞれ独立自尊でいきましょうと話をしていたところです。

ところで、先ほど佐道先生から、政治学の中でも政策分析で対応できるのは一部分であり、すべてを説明できるものではないという一言がありました。特に、政治学を学ぶ中では、歴史研究が大いに担う部分があることに、私もそれほど意見が異なるものではないと考えています。他方で、政治学における歴史研究と実証主義的な理論研究が対立するものであるとは必ずしも思っていません。両者は、研究における車の両輪で融合的な部分について、これからもっと探求していかないといけないとも考えています。これについては、私たちが『公共政策の歴史と理論』という本を書いていますので、それを読んでいただけると、今述べた意図が伝わるのかなと思います。そこはむしろ対立的というよりは、これからどう融合していくのかと、あるいは、それぞれの特徴を出していくのかと考えています。

そこで最後の部分ですけども、今の日本の社会は第3の大きな変革の時期にあると思います。それぞれの先生方がおっしゃっていた共通の認識に変わるところはありません。明治維新というのがあって、そして太平洋戦争があって、今は第3の大きな変革期にあるということです。おそらくこれまでの第1、第2の変革期よりも、もっと変化のスピードが速くて、そして大きく変わっていくんだろうなというような漠然とした感覚があります。

その一方で日本の社会の中で、多くの制度とか仕組みが、意外とつぎはぎを重ねながら今も生き残っています。国民健康保険の仕組みが典型的です。皆さん、疑問に思いませんか。国民皆保険制度の最後の砦ともいえるのが国民健康保険であって、この仕組みで大きな責任を担っているのが市町村す。戦前は市町村主体の任意加入の仕組みでしたが、戦後は国により市町村による強制設立・強制加入の仕組みとして制度化されたものの最終的な責任を担うのは市町村のままでした。そして、この仕組みが微調整を加えられながら現在まで続いているのです。

そこで総合政策学部は、これからどうあるべきかということですが、「創発」というキーワードを挙げたいと思います。これは生物進化やシステム論の考え方で、心理学でも使われていますけれども、これまでのいろいろな過程の中からは説明がつかないまったく新たな変化が生まれることです。これからの時代は、社会科学もそうですし、特に社会経済の仕組みもそうですけれども、同様に総合政策学部自らが、自分たちの学部の名前とか形にこだわることなく、自らを抜本的に変えていくことを示しています。これは、絶えず原点に立ち返りつつも、敢えて変革に身を委ねて「創造的な破壊」を成し遂げて行くことです。

そして最後の学生像というところですけれども、「独立自尊」というキーワードを挙げました。この言葉はいうまでもなく福澤諭吉先生が繰り返し述べて、特に慶應義塾の根本的な哲学として繰り返し言及され、そして、とてもよく知られている言葉です。しかし、この言葉は決してこの慶應義塾社中だけではなくて、近代日本を打ち立てた多くの日本人に向

第5代学部長
桑原　英明　氏

今後10年の社会情勢の変化
再構築

総合政策学部の進むべき道
創発

これからの総合政策の学生像
独立自尊

けた言葉なのです。ただ悲しいことに、それを実際に実践できたのはいわゆるエリート層の人たちです。しかしながら、多くの日本人は必ずしもそうではなくて、いわゆるお神輿を担いで、そしてみんなでわいわいやっていくというようなことになっているのではないでしょうか。改めて「独立自尊」の意味を考えてみるべき時代ではないかと思います。つまり、これからの時代には、我々一人ひとり、市民一人ひとりが考えるべき、もつべき哲学ではないかという意味です。

そのうえで、私なりに理解しているのは、やはりこの世に生を受け1回限りの人生で、私たちには、それぞれ天命があると思うんですね。何か成し遂げるべき一つのことがあると思うんです。そういった天命あるいは使命というものを、志を持ってやり抜いていくということが、本当の我々一人ひとりにとっての「独立自尊」ではないでしょうか。そういう意味で、最後のキーワードとして「独立自尊」を挙げた次第です。

（竹田先生） 4人の先生方、ありがとうございました。表にすると今後10年の社会情勢の変化、進むべき道、求められる学生像ですけれども、こういう形で出していただきました。時間はだいぶ限定されてきますが、これから、特に学生さんにしたら一番最後のこれからの学生像について、フロアのほうからパネリストの方に質問をしていただければと思います。挙手を、質問される先生の名前も含めて。

今後10年の社会情勢の変化を予想しつつ、学部の進むべき道を探る

	奥野 信宏 氏	佐道 明広 氏	由里 宗之 氏	桑原 英明 氏
今後10年	学問の基軸	独立自尊	「惜しみなく老いは奪う」	再構築
進むべき道	グローバル化	地域	不易（選択肢の一つとしての）	創発
学生像	行動力	自主協調	自立（Be yourself + Prepare to take care of yourself）	独立自尊

（学生） 先生方、貴重なお話、どうもありがとうございました。それで奥野先生にお話を伺いたいのですが、これからの世の中、グローバル化になっていって、英語が必須になるとおっしゃられていましたが、それは社会で出てから、どのような道に進んでも、それはいえることなのでしょうか。

（奥野先生） そうだと思いますね。今、君たちパソコンは自由に使っていると思うけれども、1990年代の末頃は、たとえば名古屋市役所に行っても、部屋に1台パソコンがあるかどうかという状態でしたが、この20年ぐらいで急速に普及しました。それによって仕事のやり方も大きく変わってきました。さっきも言いましたが、若い人たちはキーボードが普通に使えるのに、偉そうにしている部長課長がキーボードノイローゼになって仕事ができないとか、役員のところに若い人が行ってキーボードを叩いている、というようなことがあちこちで普通に起こりました。同じことが20年後に英語で起こると思っています。

これは英文学を学べとか、そういうことではありません。私も別に英語が得意なわけではありませんが、さっき言いたかったのは、たとえばNHKの第2放送は朝からいろいろなレベルの英語放送を流して

いますね。基礎英語とか、タイムトライアルとか、英語ニュースとか、国際放送とかを朝早くから夜遅くまでやっている。そういう放送された番組は、NHKにアクセスすればスマホとかでいつでも気軽に聞けるはずです。それを通学の電車のなかで普通に聞く習慣をつけることです。

英語が苦手という学生諸君もいると思いますが、面白い逸話を最近目にしました。ある若手の大学教授が、有名な進学校を出ているのですが、英語が全くダメだった。高校のときに先生に、君、それじゃあ大学に行けないぞといわれて、何をやればいいかと聞いたら、中学校の3年分の教科書を覚えろといわれた。そういうことは得意なので数ヶ月かけて3冊覚えたら、入試のときには英語が一番得意科目になったっていうのですね。同じ頃に中日新聞に面白い記事があって、大学入試の9割が中学校の英語で解けるという主旨でした。中学校の英語なら、英語が苦手の者にも難しくはない。だから基礎英語を聞いて反復練習しながら、自分でブツブツいう。さっきいったように。そういうことを繰り返すのですが、半年間繰り返すと本当にペラペラになっていると思います。そういうちょっとしたことを心がけることが大事ではないかと思います。

（竹田先生）ほかにどなたかありますか。これからのこと。

（ナガオカさん）1年のナガオカです。佐道先生に質問なんですが、なぜ今が変革の時期なんでしょうか。

（佐道先生）難しい問題ですね。そのテーマで大きな本が書けそうな気がしますけれども。先ほどいったように、いろんな要素が混じり合っているんですね。で、時代がゆっくり流れる時期と、いろんなものが一度に変わっていく時期というのが、やっぱりあるんです。皆さんが生まれる前、国際政治という中では冷戦というのがあって、実はこの時期というのは非常に長いこと、ソ連とアメリカ（ソ連はロシアになりますけど）の対立で固定化されていた時代でもあったんですね。それがなくなった。そうすると、その時代に封印されていたさまざまな民族問題とか、いろんなものが出てきやすくなった。そうすると、いろんな社会が混乱をする。それに加えて、大変なスピードで技術革新が起こってきている。私、1988年ぐらいから勤め始めましたけど、大体みんな手書きでレポート作ったりしてるんです。私も修士論文は手書きで書いています。もう今、そんなこ

とあり得ないでしょ？

携帯だって、今みんなちゃんと持ってますけど、つまり技術革新がいっぺんに進んでくることによって、過去100年ぐらいかけて変化をしてきたものが、今は多分10年20年の間に一気に変わってしまうということが起きてきてしまっているんですね。それが政治面でも経済面でも、あるいは社会の皆さんの生活の面でも全部起こってきている。ということから、複合的な変化になっている。人が移動するのも、昔は限られた手段しかなかったんですが、今は本当に便利にあちこちに世界中を移動することができるようになっているとかですね、もうそういう人、金、情報、さまざまなものの移り変わりとか、そういうのが現在の非常に大きな変化を後押ししているということになっていると思います。

（竹田先生）私にはキーピングという大事な仕事がありまして、もっとフロアーから質問ということですが、これからは学内で先生をつかまえて質問とか、聞いてもらいたいとお願いします。

6時10分までがここのホールの時間ですので、ちょうど5時間目の終了ということで、参加者、パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。全員で拍手で。

（＊拍手）

（＊終了）